様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　６月　３日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７２０３０４

研究課題名（和文）　第二言語習得時のモチベーションに対して環境が及ぼす効果

研究課題名（英文）　Effect of Environment on L2 Motivation

研究代表者
AUBREY　Scott（AUBREY　SCOTT）
関西学院大学・言語教育研究センター・講師
研究者番号：４０５８４１１５

研究成果の概要（和文）：
今回の長期にわたる比較研究は、日本の国際的な大学と非国際的な大学といった２つの語学学習環境で、学生の意欲的学習行動に影響を与える要素を調査しようとする試みであった。量的及び質的なデータは、国際的な英語会話コミュニティに対しての態度の差や、その結果生じる意欲的学習行動の差を調査する過程で生じた言語的接触の中で収集された。今回の２年にわたる研究では、研究代表者による２つのプロジェクト(Aubrey 2009, 2011)や、国際的な大学と非国際的な大学の２校で行われた予備実験を含む先行研究に加えて、以下の研究課題に取り組んだ。

① 日本の大学の１学年目に在籍する英語学習者が持つ、英語学習に対する動機付けや態度についての性質は、国際的な大学と非国際的な大学のそれぞれの環境下でどのように異なるのか。
② 日本の大学の１学年目に在籍する英語学習者が持つ、英語学習に対する動機付けや態度についての性質は、国際的な大学と非国際的な大学のそれぞれの環境下で１年度を通してどのように変化するのか。

研究成果の概要（英文）：
This longitudinal comparative study attempted to investigate factors which influence motivated learning behavior in two English language learning environments: a distinctly international Japanese university and a non-international Japanese university. Quantitative and qualitative data were collected on language contact in an effort to investigate changes in attitudes toward the international English-speaking community and changes in resulting motivated learning behavior. Adding to previous research, including two projects by the Principal Investigator (Aubrey 2009, 2011) and a pilot study at these two institutions, this two-year study addresses the following research questions.

① How do the motivational and attitudinal dispositions of first-year Japanese university English learners differ in an ‘international university’ environment and a ‘non-international university’ environment?
② How do the motivational and attitudinal dispositions of first-year Japanese university English learners change over the period of one academic year in an ‘international university’ environment and a ‘non-international university’ environment?

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード： motivation, intercultural, EFL, diary, international, English

１．研究開始当初の背景

日本で英語能力を向上させるにあたって、“国際社会を生きるという広い視野とともに、国際的な理解と協調は不可欠となっている（文部科学省、2003 年)”。この 50 年間にわたり、“異なる集団”に対しての理解や個人的興味は、第二言語学習での動機づけ（L2 motivation）においての主要な概念であった(Gardner and Lambert, 1972)。しかし、日本語の言語学習環境の中では、英語学習者は語学の授業のほかに英語話者と交流する機会を持つことは困難であった。このような環境の下で、多くの日本人が英語を話す人々やその文化を深く理解することが出来ていない状態にある。Yahima(2002)は、日本人語学学習者の中でも、“外国の、もしくは国際的な事柄に興味を抱く者、滞在目的もしくは仕事のために海外に行く意欲がある者、進んで海外の人々と交流しようとする者“は英語を話す意欲をより持っていると述べている（p.57)。国際的なコミュニティに対するこのような方向付けを説明するにあたって、Yashima は「国際的志向性（international posture)」という、態度についての構成概念を開発した。Yashima（2002,2004）および研究代表者の独自調査(Aubrey, 2010)は、国際的志向性と第二言語で交流をしようとする意思の間には明確な相関関係があることを表している。

２．研究の目的

本研究の目的は、国際的志向性やその他の動機付けの変数の変化を２学期にわたって調査すること、また、その変化は国際的なコミュニティとの交流によってどのような影響を受けるのかについて調査することである。結果は、国際的な大学の学生および非国際的な大学の学生からのサンプル比較により導かれる。

第二言語学習での動機づけ（L2 motivation）についての理解をより深くするために、本研究は「L2 セルフシステム理論(L2 Motivation Self System)」という近年 Donyei (2005).によって提唱された理論を用いる。本研究に特に関連するのが、Csizer and Kormos の研究である(2009)。この研究は、“グローバル社会において英語が果たす役割について、学生は、第二言語学習においての特に重要な原動力としての役割だけではなく、語学学習の成功者としての自分自身の将来のイメージを形成することに寄与する役割も持っていると考えている”ことを結論付けている(p. 106)。しかしこの研究結果とは異なり、現在までの研究では動機付けの変数としての多文化環境下における言語的接触が与える影響について、検討がなされてこなかった。本研究では、国際的な大学と非国際的な大学における英語学習者の、上述の動機付け要因に基づいたモデルを構築することである。また、２学期にわたって計測された変数に見られる重要な相違点を追及する。

2 大学で収集したデータを踏まえ、本研究では以下の事項について明らかにする。

- 言語的接触において生じた変化（アンケート調査）および授業外で経験したことについての調査（オーディオ日記）を、１学年目に在籍する英語学習者を対象に調査する。
- 1 年度の中で国際的態度において生じた変化（アンケート調査）および得られた経験に対する反省点（オーディオ日記）を、１学年目に在籍する英語学習者を対象に調査する。
- 動機付けの変数において生じた変化：自己義務、理想自己および学習環境（アンケート調査）について調査する。
- 実際の意欲的学習行動において生じた変化（アンケート調査）を、１学年目に在籍する英語学習者を対象に調査する。

３．研究の方法

本研究の手順としては、質的サンプルの測定（デジタル録音されたオーディオ日記）と、量的サンプルの測定（アンケート調査）の両方を用いた。本研究のような調査において、オーディオ日記を収集するという手法はとてもユニークなものであり、この手法によって充実した内容の結果を得ることが出来た。また、本研究は時系列調査の性質と比較調査の性質を兼ねそろえている。サンプルデータは、国際的な大学として立命館アジア太平洋大学、非国際的な大学として関西学院大学からそれぞれ収集を行い、変数の変化を比較した。

信頼性、妥当性の確保や、従来の研究との比較を実現させるため、理想自己（L2 ideal self)、義務自己（L2 ought-to self)、学習経験（L2 learning experience）および意欲的学習行動といった各要素についてデータを収集するにあたっては、当研究分野の第一人者によって開発され、改良を重ねられたアンケート（特に Cziser and Kormos（2009）に基づいた質問から構成される）のみを使用した。

しかし、247 名の学生からアンケートを収集した後に因子分析を行ってみると、理想自

己を測定するために使用した質問は上手く作用せず、結果として無効であった。そこで、最終的にはアンケートからは理想自己に関係する質問を除外した。このようにして完成したアンケートは、確かな信頼性が確保できるものとなった。表１は、第１回目に実施をしたアンケートによって測定されたそれぞれの変数の信頼性係数を表している。

【表1】各変数に対する項目数とクロンバックのα係数

	A大学		B大学	
変数	項目数	α係数	項目数	α係数
A	6	0.85	6	0.81
B	6	0.82	6	0.78
C	4	0.80	4	0.84
D	4	0.80	4	0.74
E	2	0.71	2	0.70
F	4	0.85	4	0.84
G	5	0.82	5	0.83

A) Approach-Avoidance Tendencies･･･接近・回避性
B) Interest in International Vocation/Activities･･･国際的な仕事・活動への興味
C) Interest in Foreign Affairs･･･国際的な事象への興味
D) L2 learning Experience…第二言語の学習経験
E) Ought-to L2 self･･･義務自己
F) Motivated Learning Behavior…意欲的学習行動
G) Intercultural Contact…国際交流

注：“International Posture (国際的な姿勢)”は、“Approach-Avoidance Tendencies”、“Interest in International Vocation/Activities”および“Interest in Foreign Affairs”から測定される。

言語的接触および国際的な姿勢についてのデータはアンケート調査によって収集し、実験参加者から得たデジタル録音されたオーディオ日記によって補足した。言語的接触に関するアンケートは The Language Contact Profile (Freed et al., 2004)の完成版に、国際的な姿勢に関するアンケートは Yashima (2002)に基づいている。

オーディオ日記が伝える内省の質は、“通常は隠れていたり外からは見えなかったりする、各人が得た経験の一面(Bailey and Ochsner, 1983, p190)”が露呈するという点で特に有益である。オーディオ日記をつけることで、実験参加者はリアルタイムで何かが起こるたびに単純に“声に出して考えてみる”ことができる。また、オーディオ日記は、紙の日記が持つ、遂行することやモチベーションの持続が難しいという問題を打破することができる(Hilsop et.al., 2005)。さらに、言語的接触と国際的な姿勢という２つの変数は、実験参加者それぞれが独自にキャンパスで得た経験によって形成される、とりわけ主要なものであり、この点において本研究が他の研究と明確に異なるものとなるため、オーディオ日記という手法は本研究にとって特に重要なものである。

初回の言語的接触についての解析は、本解析に際して理想的である、次の５つの条件を満たす実験参加者を対象とした；①母国語が日本語である。②1 学年目に在籍している。③第１学期中である。④海外在住経験が１ヶ月以下である。⑤英語習熟度が中級レベル(TOEFL score of 450-500)である。全ての質問は実験参加者に対して、春学期開始時期と秋学期終了時期の２回行われ、合計で 282 名の学生が参加した。また、２つの大学のそれぞれ 120 名の学生から 10 名ずつを無作為に抽出し、デジタルボイスレコーダーを渡してオーディオ日記を依頼した。オーディオ日記には、春学期と秋学期それぞれ 10 週ずつにわたって、授業の外で生じた英会話での交流についての自身の経験を反映するよう指示を行った。オーディオ日記の内容は、立命館アジア太平洋大学の研究助手によって週に１度日本語から英語に翻訳され、文字に起こされた。長期にわたってオーディオ日記に協力した 20 名の学生に対しては、ワークショップを開催し、それぞれに謝礼金として 10,000 円を支払った。

データの解析にあたっては、２つの解析プログラムを導入した。１つ目の SPSS (version 19)は、各変数の解析、信頼性の解析および記述統計に用いた。２つ目の AMOS (version 19)は、SPSS に加え、各変数に関係する構造方程式モデルの作成に用いた。これらは一般的に社会科学分野の研究においてソフトウェアパッケージに使用されるものである。内容分析は量的データを分析する際に用いた。（例：テーマごとのデータ符号化）

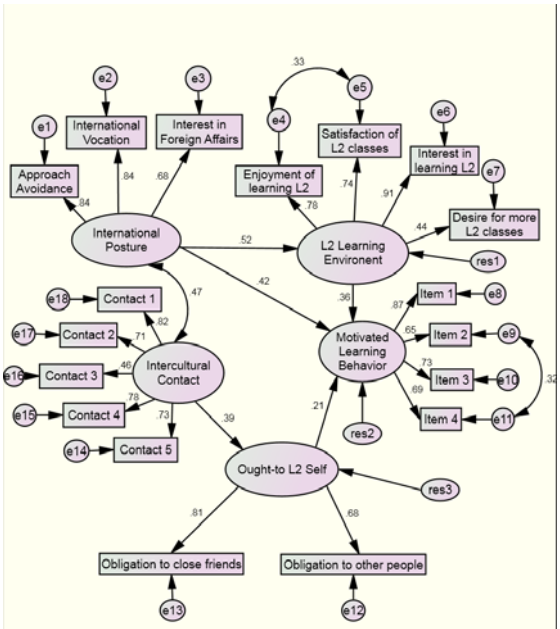
４．研究成果

２大学の 20 名の学生から得たオーディオ日記からなる質的データは、合計で 1600 分以上に及んだ。2 回にわたって実施されたアンケート調査からなる量的データは、282 件の回答があった。この調査から、大きく分けて４つの結果が導かれた。

１つ目は、国際的な大学で英語を学んでいる日本人学生と非国際的な大学で英語を学んでいる日本人学生では、同じ構造方程式モデルから予測される意欲的学習行動を示すことが結論付けられたことである。

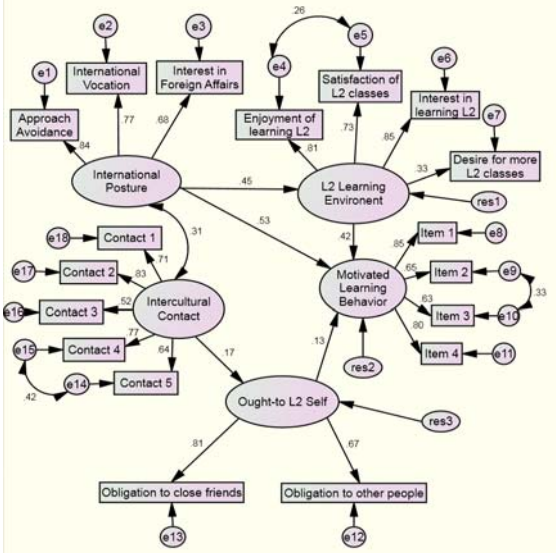
図１および図２は、初回のアンケート調査に基づく各大学においての構造方程式モデルを表している。

【図 1】国際的な大学の 1 学年目に在籍し、英語を学んでいる日本人学生の構造方程式モデル



N = 172, RMSEA = 0.047, 90% confidence interval for RMSEA: (0.028, 0.063), Chi-squared = 174.5, GFI = 0.905, AGFI = 0.872, CFI = 0.965.

【図 2】非国際的な大学の 1 学年目に在籍し、英語を学んでいる日本人学生の構造方程式モデル



N = 110, RMSEA = 0.052, 90% confidence interval for RMSEA: (0.024, 0.073), Chi-squared = 162.8, GFI = 0.863, AGFI = 0.814, CFI = 0.955.

モデル自体は国際的な大学で英語を学んでいる学生と非国際的な大学で英語を学んでいる学生の双方に適合していたが、モデルに含まれる変数が学生の意欲的学習行動に与える影響には大きな違いがあった。まず、異文化接触は、国際的な大学の学生に対してのみ彼らの国際的な姿勢に重大な影響を与える。また、間接的にではあるが確実に、意欲的学習行動にも重大な影響を及ぼしている。さらに、義務自己（L2 ought-to self）も、国際的な大学の学生に対してのみ意欲的学習行動に重大な影響を及ぼす。これらの結果は、質的データ、量的データの双方から裏付けられた。

2 つ目は、どちらの環境下の学生も、データ収集期間を通して態度や意欲の変化には大きな差がないことがアンケート結果によって判明したことである。しかし、t-検定では、いくつかの変数において 2 つの大学間ではアンケートのスコアに大きな違いがあることが明らかになった。国際的な姿勢、第二言語の学習経験および義務自己のスコアは、2 回のアンケート調査の両方において、国際的な大学の学生の方がずば抜けて高いものであった。

3 つ目は、国際的な大学の学生が 1 人につき 1 週間に 12.4 件の国際交流経験を獲得したのに対し、非国際的な大学の学生は 2.7 件のみの獲得であったことが質的データにより判明した。この結果は、国際的な大学の学生がそうでない大学の学生の約 5 倍にもなる国際交流を経験していることを表している。より解析を進めると、国際的な大学では異文化間交流の時間も長く、主に学生寮など構内で行われていることもわかった。さらに、国際的な大学で生じる国際交流での話題は、学生の異文化についての興味や理解をより深めさせるものであった（旅行やキャリアプラン、政治問題や宗教など）。質的データは、国際的な大学の学生が、国を超えた友情や国際的な知識を得ようとする欲求、国際社会に対しての総合的で肯定的な経験を得たことを示した。

最後に 4 つ目は、オーディオ日記という手法は、語学行動についてのデータ収集において有益で妥当な方法であると評価できた。終了時に行ったアンケートにより、以下のような肯定的な評価が得られた：1)実験参加者は、1 ヶ月の間に自分たちが得た日々の語学交流にまつわるエピソードについて、洞察に満ちた詳細な報告を行うことができた。2）得た経験を正確かつ率直に報告してもらうために、日記の内容は匿名で扱われた。3）ボイスレコーダー機器は手軽に扱えるため、実験参加者の日々の学生生活に支障をきたしにくい。

これらの結果の最も重大な意義は、異文化間交流という指数を、言語学習におけるモチベーションを表すモデル図に取り込んだという点である。それだけではなく、語学学習についての研究分野において、オーディオ日

記という手法がもたらす効果についての研究にも貢献を果たした。
異文化間交流が学生の意欲的学習行動に大きな影響を与えることが究明されたことにより、これらの結果は日本の語学教育や国際教育のカリキュラム改革に影響を及ぼすことであろう。本研究成果は、外国語講座における文化教育や海外留学コースの整備、国際的な大学を形作るにあたっての決断等において価値を持つと考える。

参考文献

- Aubrey, S. (2010). Influences on Japanese EFL students' Willingness to Communicate Across Three Different Sized Classes. Asian EFL Journal. Thesis section (under review for publication)
- Bailey, K.H. and Oschner, R. (1983) A methodological review of the diary studies: windmill tilting or social science? In Second Language Acquisition Studies, eds. K. M. Bailey, M. Long and Peck, S., 188-198 Rowley, MA: Newbury House
- Cziser, K. and Kormos, J. (2009). Learning Experiences, Selves and Motivated Learning Behaviour: A Comparative Analysis of Structural Models for Hungarian Secondary and University Learners of English. In Motivation, Language Identity and the L2 Self, eds.Dornyei, Z. and Ushioda, E. 98-119 Multilingual Matters
- Dornyei, Z. (2005). The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum
- Hilsop, J., Arbor, S., Meadows, R., Venn, S. (2005). Narratives of the Night: The Use of Audio Diaries in Researching Sleep. Sociological Research Online. Volume 10, Issue 4.
- Student Enrolment at Ritsumeikan Asia Pacific University (May 1, 2010). Retrieved from: http://www.apu.ac.jp/home/modules/keytopics/content/Gakusei(10.05.01.).pdf
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: the Japanese context. The Modern Language Journal 86, 54-66.
- Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect onwillingness to communicate and second language communication. Language Learning 54 (1), 119-152.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① Scott Aubrey and Andrew Nowlan, An evaluation of audio diaries as a research method in language research, Proceedings of the 19th Annual KOTESOL International Conference, 査読有, 2012, 87-98

〔学会発表〕（計６件）

① Scott Aubrey, Impact of different environments on foreign language motivation, TESOL 2013 international convention, 2013/03/22, Dallas, Texas, USA
② Scott Aubrey, Using audio diaries in foreign language motivation, 9th annual CamTESOL conference, 2013/02/23, Phnom Penh, Cambodia
③ Scott Aubrey, Intercultural interaction and its role in university EFL communities, 9th FEELTA international conference, 2012/11/03, Vladivostok, Russia
④ Scott Aubrey, The effect of environment and intercultural contact on L2 motivation, 19th Korea TESOL International Conference, 2012/10/16, Seoul, Korea
⑤ Scott Aubrey, The effect of intercultural contact on L2 motivation, 38th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Materials Exhibition, 2011/11/20, Tokyo, Japan
⑥ Scott Aubrey, Intercultural Contact and L2 Motivation: A Japanese International University, 2nd Asian EFL Journal and Asia TESOL International Conference, 2011/08/12, Cebu, Philippines

〔図書〕（計１件）

① Scott Aubrey and Andrew Nowlan, Multilingual Matters, Language learning motivation in Japan, 2012, 印刷中

６．研究組織

(1)研究代表者

AUBREY Scott (AUBREY SCOTT)
関西学院大学・言語教育研究センター・講師
研究者番号：40584115